



いま生きていくということに、 耳を澄ます

稲葉俊郎
(医師)

わたしたちは、誰もが一人の例外もなく過去に赤ちゃんでした。人間は、必ず赤ちゃんという状態を経て成長していくということは、人間の本質を考える上で重要なことです。

赤ちゃんの頃、誰もが弱く脆い存在でした。生まれた直後から、わたしたちは誰もが生き抜くことに必死でした。1日1日を生き抜くことだけを目的に、なんとか生きてきました。だからこそ、人々は生命について、生きることに、あらゆる叡智を探究してきたのです。医学もその流れの一つにすぎません。

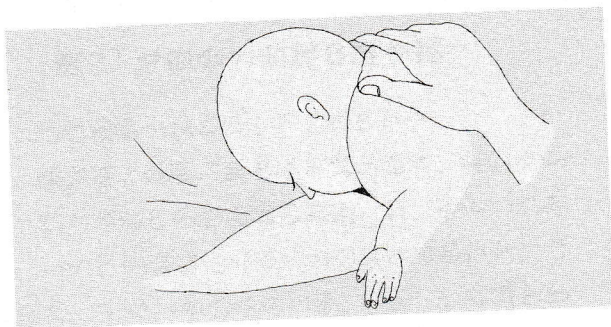
「必死に生き抜く」は本能

生まれた直後から、生きとし生けるものは、食の心配をする必要があります。呼吸も、肺で行なう気体食です。呼吸をするのも命がけで全力です。おぎゃー、と泣きながら、必死に息を吐きます。そして、お母さんのお乳に吸いつく行為も命がけで全力です。「ほ乳行為」をするからこそ、生物学的なトは「ほ乳類」の一部(この「ほ乳行為」は生まれた直後、母乳やミルクを飲んで生き抜くためになくてはならない重要な働き)です

いなばとしろう ◆1979年、熊本県生まれ。東京大学医学部医学科卒業。現在、東大病院循環器内科助教、医療の垣根を越えた対話や活動をしている。著書に『(アノニマ・スタンプ)』などがある。

が、大人になるとほとんど使うことがありません。弱い時期に何とか生き抜くことが、生きることの基礎となるので、そのためだけにほ乳行為が残されているわけです。生きることは、生き抜いていくことと同じことです。だからこそ、今生きている人は、すべての人が過去に生き抜いてきたこと、生き残ってきたことの揺るぎない証明でもあります。

お乳に食らいつこうとしても、顎の力が足



りなければうまく飲み込めません。そのとき、お母さんはほ乳瓶でミルクを与えてくれ、欠けることなく食を与え続けたはずで、す。トイレも自力でできません。おむつは誰かが必ず替えてくれました。それも一度や二度だけではなく、数時間おきに、何度も何度も。寝ているときでさえも気にかけてくれたはずで、す。24時間休みなく、必ず誰かが傍にいて見守っていたのです。1日たりともおろそかにできません。

母乳やミルクを受け取り、排泄物を処理してもらい、目を離さないように気にかけてもらう。こうした体験は、忘れていようとも誰もが受け取っていることです。そうした身体記憶が身体や記憶の奥底で眠りについていますが、いま生きていく、ということがその証明です。わたしたちは弱さを核として生ま

れ、生きてきたからこそ、「愛」を体験することで生命は生きることを保てるのです。わたしたちの生命活動の奥底には、そうした体験が深い場所に埋め込まれており、体はそうした滋養を受け取っているのです。

「笑い」が自分と世界の扉を開く

あらゆる「はじめて」の体験を無限のように重ね続けて、成長してきました。今自分には8カ月の子供がいます。生まれて2カ月のときに「初笑い」をしました。「あはははー」と。生理的微笑と言われる笑顔のような表情はよく見かけましたが、顔の表情と声の運動が連動したのは生後2カ月ではじめてでした。「笑う」という単純な行為がこんなにも人を幸せにするのかと思いました。誰もがこういうプロセスを経ています。誰にでも、は

じめて笑った日が、あります。「快」という感情と、全身の筋肉を使って「笑う」という動作とがはじめて接続した瞬間。心の動きが身体の動きとして外に表現される。身体の動きが、また心への動きへと影響を与える。内界と外界の通路は「表現」としてこの世界に顕現してきます。ただ「笑う」だけで、こんなにも感動するものかと思いました。

日本神話の古事記でも、天照大神が天岩戸にひきこもると、光が失われます。世界は闇となります。そのとき、アマノウズメの踊りを含め、神々が自然と力を合わせてどつと「笑い」が起きたとき、「笑い」によって世界は開かれ、闇の世界に一筋の光が差し込んできます。これは、古代の人がわたしたちの内的世界を象徴的に表現しているのかもしれませんが、「笑う」という誰でもできる単純な行為が、自分

の内側を開き、世界も開くのです。仏教でも、誰でもできるお布施の一つとして、和顔施があります。お布施するお金がなかつても、笑顔だけで、それはすでに世界に何かを与えたお布施になる、という意味です。

こうした内界（心）と外界（体）との無限の相互作用の積み重ねの果てに、内界と外界の接点としての「自分」が立ち上がってきます。それは、赤ちゃんの頃から、今もまさに

進行中のプロセスなのです。

どんな人にも「初笑い」はありますが、自分自身では決して見ることはできません。でも、誰かがあなたのあらゆる「はじめて」を見ていました。それは両親や兄弟などの人間の時もあれば、木や太陽や光などの自然物であったかもしれません。

どんな人の体にも、とにかく生きてほしい、という祈りがあらゆる形で残っています。だからこそ、あなたは今、生きているのです。人間は、弱いからこそ誰かに支えられる必要があります。もし、自分が少しでも強くなったら、今度は支える側に回るのです。そうして、わたしたちは生命を受け継いできました。生命はそうして大切に大切にはぐくまれ、手渡されてきたものです。生きているということは、そうした全体像のことなのです。

